

# 角永の作品 思いつくままに

ジョージン・イアンコ・スターレルス

角永和夫の作品に初めて出会ったのは、エド・ラウの主宰するスペース・ギャラリーでのことでした。この画廊では、何年も前から啓発される作品に出会っていて、豊かな気分させられたものです。さて、ギャラリーの純白の部屋に入ると、まず目に飛びこんできたのは、手漉きの紙のドッシリとした断面であり、枝葉を取りはらった竹であり、そして樹皮を剥いで切断された艶やかな木の幹でした。シンプルで飾り気がなく、手が加えられていないのに、並外れて感動的なものがそこにはありました。

私はそれまで、これらに生の素材としては馴染みがあっても、素材に隠された本質をストレートに表現しているものは見たことがありませんでした。それ以前に出会った素材には芸術家の手が加えられていました。木はいつも手荒く切り出され、ヤスリをかけられ、たくみに切り分けられ、磨かれ、もしくは嵌め込まれ、芸術家の視覚や聴覚、感受性にもとづいて造形されたものでした。ところが、角永の作品は違っていたのです。

私の前にある作品を長く見ていると、作者の意図が明らかになってくるのです。素材の神髄が、造り手の意思を超えているのです。自然と自然を構成する素材に対する直接的な答えとして、彼のアートは生まれてきたのです。それは、素材そのものの強さ、順応性、肉感的な外観、無限に入り組んだ構造、そこに秘められた変容の可能といった、木の本質なのです。この作品に出会ってから、私は、これまでに教えられてきて、当然のことに思ってきたのとは異なる視点で考慮するようになりました。

ヨーロッパの芸術家の家庭に育ち、長じて現代美術を人生の中心に置くようになった私

は、アートというものは芸術家の個性を反映し、顕現するものだとばかり思っていました。実用的にであれ・審美的にであれ、素材をオブジェにどう変容させるかは、造り手が決めることだと考えてきました。美術史からはまた、芸術作品は時代と風土に影響され、それが作品の背景となり、芸術家のスタイルに影響を及ぼすのだということを学びました。書物から得た私の薄っぺらな知識で申し上げるのですが、角永の作品は明らかに異質の伝統に深く根ざしています。では、なぜ驚いたのでしょうか。なぜなら、と私は自問自答しました。その作品の外見が、完璧なまでにミニマルで、実に見事に西洋の現代彫刻の様式で表現されているかに見えたため、その伝統的基盤にまで思いが至らなかったからなのです。

そこには、私が日本の審美的特徴と考えていたものは何も見当たりませんでした。角永の作品は新しく、現代的で、世界のどこへ持っていっても通用しそうに見えました。その作品はどこの画廊でも、世界のどんな主要文化都市でも、どこに置かれてもしっくりと馴染むことでしょう。その並々ならぬ特性を理解するには、表面ではなくその本質に目を向けなければなりません。

日本美術には、かつて、隣国である中国と朝鮮の美意識を高く評価して、取り入れてきた長い歴史があります。これらの影響は、徹底的に吸収され、消化され、うまく適合されて、今ではまったく新しい「日本的」個性に変貌しています。

19世紀後半に明治維新が起きてから、西欧の思想が日本の知識人たちの間に浸透し始めます。20世紀を迎える頃には、東西の交易が頻繁になるにつれて、西欧文化に対する認識も深まってきました。日本人の芸術家も海外

に渡航するようになり、中には、パリを始めとする西欧の都市に腰を落ち着ける者も出てきました。冒険心に富んだ西洋人は東洋を旅行しました。書物や雑誌を通じて、遠い大陸の情報や映像が広く行き渡るようになりました。

それでも、このように文化交流の機会が増えたにもかかわらず、孤立した島国の美的伝統はそのまま生き残ったのです。第二次世界大戦前の日本は、自意識過剰な諸外国の間にあって、一つには地理的な条件に恵まれたことから、また一つには海外からの影響に強く抵抗するという伝統によって、外部からの影響を受けることが少なかったのです。

第二次大戦後、このような偏った孤立状態は崩壊します。戦争に破れ、その結果、アメリカの占領を受けたことで、伝統的なものに対する価値観が弱まり、国際社会に参加したいという日本の意欲が増してきました。産業界は繁栄を目指し、通商の範囲を拡大すると同時に、イデオロギーの境界を広げていきます。孤立を求めるのではなく、競争力を高めることに力を注いだ結果、日本は工業生産技術と組織力を発揮して、めざましい経済的発展を遂げてゆきます。それにともない、創造的な分野でも優れた成果が生まれました。

伝統の束縛が弱まり、表現の自由が浸透して、美術家、作家、映画製作者に新しい試みをする余地が広がってきました。それに伴い、詩、文学、美術、映画が花開きます。藤田(嗣治)、(イサム)ノグチ、黒沢(明)の名前を思い浮かべただけでも、東西の交流からもたらされた思潮が大いなる刺激となって、偉大な才能を育み、素晴らしい芸術作品に結実させたことが理解できるでしょう。事実、制作者たちが異文化をしっかりと踏まえ、様々な伝統を吸収したことが、彼らの作品を更なる高みに昇華させていったのです。

実業界の営みが東西間でスムーズに、かつ成功裏に進む一方で、その背後には文化の面

で根源的な相違のあることが明らかになってきました。ユダヤ教とキリスト教に基づく西欧の文明は、神が頂点に立って人類を支配し、一方、人類は自然と自然に内包される全てのものを版図として与えられるという、ピラミッド形の構造の上に成り立っています。これは日本人の精神生活で哲学的思想の核となっている神道や仏教とは、きわめて対極的な位置にあります。日本では、多くの神々が存在し、それらが人間の運命を左右すると考えられています。また、自然が崇められ、人間はその片隅で生きているにすぎないと思われているのです。そして、人間は瞑想と儀式を厳密に遵守することによって、悟りを開く能力を授けられているとみなされています。

更に、日本では、創造への衝動は精神的かつ直感的なもので、孤独で、非論理的なものともみなされていますが、西欧ではそれは、才能を鍛錬し、教育し、訓練した結果えられるものだと考えられているのです。

角永は、一芸術家として、自らを、地理的・文化的に切り離された者とは考えず、国際的な芸術家共同体の一員だと思っています。彼の作品は、ある意味で、東洋人の敬虔で瞑想的な心と、西洋人のミニマル・アートの美意識やコンセプチュアル・アートの考え方を、きわめて自然にあわせ持っています。この百年間、近・現代美術は、創造力の証しとして、様々な変革を試みてきました。これが、まさに、角永の個性にぴったりと合い、彼の探求心に富み、ほとんど科学者のように実験に適進する生来の体質に火をつけたのです。

ここ何年もの間、角永は自然の素材に作晶の的を絞ってきました。彼は、文学的かつ比喩的に言うと、木と紙、そして竹と絹、ごく最近ではガラスにスポットライトを当ててきました。これらの素材は、次から次へと彼の精密検査の対象となっていくのです。彼はそれらを構成する各部分を分析し、特性を

テストし、湿度の変動とか強い衝撃といった、環境要素に反応して素材がどう変化するのか、固有の特質について調べ上げたのです。それぞれの

素材は、飽くなき発見の欲求に衝き動かされた角永の好奇心という顕微鏡のもとに、次々とそのユニークな性質を明らかにしてゆきます。

この10年、角永はガラスに、成分として、あるいは素材としてのガラスに集中して取り組んできました。当初、すでに衆知のガラスについて、角永はインフォメーションをどこまで広げていけるのか・それをどう存在価値のあるものに変えていくのか、誰も想像できませんでした。人造ガラスの起源は、長い歳月を経てわからなくなってしまうしました。有史以前・火山活動によってもたらされた黒曜石とか、石英の透き通った結晶である水晶から、

オブジェは作られていました百何千年の間、ガラスは吹いて造るか、熱で溶かして鑄型に流し込んで造られてきました。このようなガラスは、エジプトの墳墓やローマの遺跡から発見されています。10世紀に入ると・ステンドグラスが教会や大聖堂の装飾に用いられるようになりました。今日では、ガラスやクリスタル製品は、全世界で用いられ、珍重されています。私達の時代になって・ガラスは板ガラスや曲面ガラスが出来て、風雨から私達の身を護ってくれています。また、透明ガラスや半透明ガラスは、限りなく視界を広げてくれ、光を採り入れ・周囲の景色を間近に見せてくれるようになりました。他にもガラスは、液体を入れる容器として使われたり、職人が手をつくした美術工芸品として私たちの目を楽しませてくれています。

他の素材を扱った時もそうでしたが、角永和夫のガラスに関する研究と実験の成果は、ユニークかつ驚きに満ちたものでした。三年かけて、ガラス工場でガラスの製造工程にな

じんだ後・角永はガラスの鑄造に手を染めません。彼が特に注目したのは、溶けたガラスの粘着性、透過光の屈折によって現れる緑の色彩・本来の脆さを感じさせないずっしりとした重量感、そして球根形の外観でした実験と研究を重ね、満足のゆく結論がでるまでにべ。10年の歳月がかかりました。そして再び彼は、素材の本質を明らかにすることで、ガラス本来のイメージを、シンプルにパワフルに、私達の前に提示してくれました。

私たちは・かつて溶解していて惨み出てきた物質が、今では凝固したオブジェとして、幾層にもこんもりと膨れあがり・粘着性のある小山となっているのを目のあたりにします。巻き上がった上に更に巻き上がり、波立ちうねっている物質。透明な溶岩のように、垂れさがりしたり落ちて、引力に形造られた物質は、盛り上がり、吸い込まれ、また盛り上がり、相撲取りの腹のように膨らんでいます。そのサイズは、氷山の一角のように、大海原の底のかなりの深みまで、下に行けば行くほど広がっているように見えます。時には、それらは不揃いな冷凍の砂糖菓子のような形になることもあります。これらの半透明で青緑色の驚くべき物体の前に、私たちは信じられない思いで立っています。素の素材で一気に造り上げられた。堂々としたスケールの強烈な昨在に、不気味な物だと思いつつも、私たちは畏敬の念すら抱いてしまうのです。角永はまた、これまでに一度も体験したことのないものを私たちにを見せてくれているのだと、認識するばかりなのです。

J A C C C (ロサンゼルス)  
ソルトレイク アートセンター (ユタ)

展覧会カタログ 序文